

ソーシャルワークにおける自閉症者支援の探求

—成人期自閉症者とその家族のライフストーリーからの考察—

The search for services of person with autism in Social Work

岸川 学

KISHIKAWA Manabu

神奈川県立保健福祉大学

Kanagawa University of Human Services

Key words: 自閉症 ライフストーリー ソーシャルワーク

目的

自閉症者は1. コミュニケーション 2. 社会生活や集団行動の意味理解 3. 想像力 に困難があるとされている。ただし、自閉症者はその特性に配慮された支援を受けることによって、本来持てる力が引き出され、社会参加の機会が増えると考えられる。これを実現するための支援は、「自閉症」の基本的な特性を十分に理解したうえで提供されることが求められる。

本研究は、成人期の自閉症者とその家族のライフストーリーの分析を通して、自閉症者が本来持てる力を発揮した支援、あるいは自閉症ゆえの困難さを伴いつつも社会的な生活を可能にした支援をソーシャルワーク視座に基づく理論を用いて分析し、自閉症者が求める支援が何かを探求する。

方法

質的研究法を用いて自閉症者支援を分析、考察した。地域社会を生活の基盤としている成人期自閉症者とその家族にライフストーリー・インタビューを実施。ライフストーリーは桜井厚ほか(2005)「ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門」せりか書房などを参考に実施、分析。自閉症者とその家族のライフストーリーを自閉症者が本来持てる力を発揮した、あるいは自閉症ゆえの困難さを伴いつつも社会的な生活を可能にした要因とその支援を多角的に検証し、ソーシャルワークの理論的枠組みを用いて分析した。

結果

自閉症者のライフストーリーは次のように集約できる。乳幼児期は診断されず、自閉症者の家族は医療から「放置」されたと受け止められた。幼少期、多動で行方不明になり、同じ言葉の繰り返しなど日常生活上の困難があった。対応が困難な行為は問題行動と捉えられ、投薬などにより改善を試みるがうまく行かなかった。学齢期前より原因不明のパニックが頻発、生活状況は悪化。さまざまな専門機関につながるが生活は改善しなかった。思春期における社会的なサービスの対応においては本人の大変さを軽減できなかったが、支援する姿勢は家族に安心感を与えた。青年期、自閉症を専門とする機関による

支援を受けることで安定期に入る。成人期、自閉症者に合わせた支援により、生活上困難が生じた際に適時、本人に寄り添った支援が展開され、本人と家族の日常的な困難さは軽減。将来は、今のような安定した生活を送ることができるか不安。専門家が近くにいたとしても使い方がわからない、であった。

考察

自閉症者の行動の「治療」に焦点化した医学モデルにおいては「問題」の所在は明確であった。ただし、その「問題」の解決は自閉症者のニーズ充足ではなかったと考えられる。支援のきっかけは「問題」となる行動の軽減であっても自閉症者と家族双方の生活に寄り添った「生活モデル」のアプローチが求められると考える。しかし、「生活モデル」の視座においては、自閉症者と家族の生活を不自由にさせているのが何かを明確にすることが困難であった。生活モデルに立脚した支援は、生活上の問題に加え、固有の困難性への配慮が求められる。つまり、ここでは一定の尺度や型ではなく、ソーシャルワークにおける様々なツールを状況と場によって使いこなすことが求められ、どこでどの道具を使うか、判断することがソーシャルワークの機能に求められる。自閉症者と家族に合わせたツールを選ぶことが、自閉症者支援におけるソーシャルワークに求められると考える。

参考文献

- G. B メジボフほか (1999) 『自閉症の理解』学苑社
久保紘章 (2004) 『自閉症児・者の家族とともに—親たちへのまなざし—』相川書房
佐藤繭美 (2011) 『自閉症の人の死別経験とソーシャルワーク 親なきあとの生活をささえるために』明石書店
大島巖・奥野英子・中野敏子編 (2001) 『障害者福祉とソーシャルワーク』有斐閣社会福祉基礎シリーズ⑦障害者福祉論
パトリシア・ハウリン著 久保紘章、谷口政隆、鈴木正子監訳 (2000) 『自閉症成人期にむけての準備 能力の高い自閉症の人を中心に』ぶどう社
桜井厚・小林多寿子編著 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房